

---

**研究情報**


---

**第1回 アジア作物学会議若手フォーラムに出席して**

大川 泰一郎

(東京農工大学農学部)

1992年9月24日から26日の3日間にわたり韓国ソウルで開催された第1回アジア作物学会議(ACSA)において、Young Scientists' Forumが開催された。この若手フォーラムは、日本作物学会の作物研究若手の会において、「アジア作物学会議で、是非アジア各国の若手研究者と交流する場を持ちたい。」という提案がもとになり、北陸農試の長谷川浩氏と韓国の Dr. S.H. Lee が窓口となって準備を進め、この会が実現された経緯がある。会議の初日には、“This forum is for anyone who thinks himself young.”と書かれた案内が配布された。大会2日目の講演会が終了し、午後7時30分より若手フォーラムが開催された。韓国24名、マレーシア1名、台湾1名、フィリピン3名、タイ1名、バングラディシュ1名、日本21名の計54名の参加者があり、20代前半の大学院生から50代の教授まで参加者の年齢層に幅があった。

Dr. Lee の司会で開催までの経緯が説明され、その後参加7カ国の代表者1名が10分ずつ講演を行った。日本からは長谷川氏による「日本におけるマクロレベルの窒素の流れ」と題する講演があり、大量輸入される農産物に対する問題提起がなされた。韓国の代表からは若手研究者のあるべき姿について意見が提案され、他の国々の研究者は自国の農業と作物学の紹介などを行った。

講演の後、総合討論がもたれたが、第1回ということもあって、議論の中心は「若手」の定義と若手研究者の組織作りについてであった。フィリピンから参加した Dr. R. Bader (フィリピン作物学会長) より Young Scientist という言葉が会に参加する人にとって障害になりはしないか、代わりに、Junior Scientist としてはどうかという提案があった。他に、「精神的に若いと自分で考える人は若手だ。」「若い人だけでざっくばらんに話せる場があってよい。」などの意見が出された。

その後、次回日本で開催予定の本会議における若手フォーラムについて論議された。若手研究者によ

る公式なミニシンポジウムを持ちたいとの提案があり、それに対して「積極的にやるべきだ。」「正式セッションとして資金面での援助を ACSA 準備委員会に要求するべきである。」などの意見が出された。一方で、非公式のシンポジウムでも良いという考えもあった。司会の Dr. Lee より日本の若手研究者を中心としてミニシンポジウムの実現に向けて交渉を進めてほしいとの要請もあった。

最後に若手研究者の組織作りに関する議論へと話に移り、若手研究者の会が活動しているのは日本だけであり、他の国々ではそのような会はないことがわかった。そこで、日本側から若手の会が発足した経緯や現在の会の活動状況を紹介した。日本に近い韓国の若手研究者からは、日本の若手の会の意義について共感が得られたが、それ以外の国からの研究者には理解しにくい面もあるように思われた。しかし、ここで芽生えた親睦の輪を広げるために、ルーズ(ゆるやかな)ネットワークをつくることで意見が一致した。

終了予定時刻の9時を過ぎてから、メッチュ(ビール)を飲みながら参加者全員の自己紹介を行った。まずは日本人からジャパニーズイングリッシュで苦労しながらも研究テーマの紹介やこの会の感想などを述べ、他の国々の参加者へと続き、相互理解を深めた。全員の紹介が終わり最後に事務局長の Y.W. Kwon 教授より挨拶を頂いた。しかし、会が閉会した後も懇談は夜遅くまで続いた。

この会に参加して、アジアの若手研究者と交流する機会をもつことができ非常に有意義であった。日本の若手の会への期待は大きく、次の第2回の会議までに議論を重ね、協力して準備を進めていく必要があるだろう。今後さらに会員の皆様に若手の会への参加、協力をお願いしたいと思う。

最後に、若手フォーラムを開催するにあたり、準備等に御尽力を頂いた韓国の Y.W. Kwon 教授、Dr. S.H. Lee をはじめ開催者の方々に厚くお礼申し上げる。